

## その十一

二つ目の例は地域高規格道路工事です。住宅地裏側を抜けていく道路でした。整備された道路が欲しいのは地方の偽らざる心です。しかし一般感覚としては、それになにも自動車専用道である必要はありません。前回例として挙げた災害復旧工事のように、切実に必要とされている工事ではありません。必要最低限のインフラが整備されている現在では、こういった直接的なメリットを感じにくい公共建設工事は比較的多いのではないのでしょうか。自分たちにとって切実に感じていない事業に、いったいそこに住む人たちは理解と協力が出るだろうか。迷惑な工事に対して諦めるか、虎視眈々とクレームの機会を伺うか。そこでは例えば「高速道路の必要性」だとかいう「大義名分」は、ほとんど通用しません。

そう考えると、公共建設工事というもの

は、負荷や迷惑ばかりを地域住民に与えてい  
る、そう受け取られる場合が多々あるのでは  
ないでしょうか。  
それまで、公共建設工事は「世の為、人の  
為」なのだ（基本的には正しいのです  
が）、そう思い込んでいた私にそのことを気  
づかせてくれたのは、現場の直ぐ近くに住  
み、工事関係者を拒絶する女性の存在でし  
た。何年か前の私であれば、そういう頑なな  
態度は、あたかも私たちに対する敵対行動の  
ように受け取り、関係は増々悪くなっていつ  
たでしよう。  
客観的に考えれば、その女性が悪いわけ  
はありません。しかし、私たちを中心におい  
た論理で考えると、工事に対する（消極的で  
はあっても）妨害者となるのです。  
目線を変えてみるだけで、他人との接し方  
は変わるものです。そしてそのことが、相手  
の態度を、それこそ劇的に変えたのです。  
勿論、私はアドバイスをしただけで、実行

した現場の若い技術屋さんの努力の結果である  
るの言うまでもありませんが・・・。